

2024年度

学校推薦型選抜・社会人選抜

試験問題

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 3 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があります。
※解答開始の合図の直後に必ず記入してください。
 - ① 氏名欄
 - ② 受験番号欄
- 4 解答は、黒の鉛筆またはシャープペンシルで、読みやすい字で濃くはっきりと解答用紙に記入してください。問題冊子の余白部分は下書き等に使用しても構いません。
- 5 試験時間は90分です。
- 6 試験終了後、問題冊子は回収しますので持ち帰らないでください。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

自分の容姿を思い通りに変えたいと、美容整形を受ける人が増え、それを動画サイトなどで公表する人が出てきたり、記録を伸ばしたいアスリートのドーピング疑惑がたびたび報道されたり、若年層の間でのスマートドラッグ（頭の良くなる薬）の使用が問題になったりと、「治療」以外の目的での医療技術の利用（手術や薬）が、現代という時代を特徴づける現象のひとつとなりつつあります。

すでに健康な人を「より美しく、より強く、より賢くする」ために、外科手術や薬物を用いて、「改造」してもよいのでしょうか。

病気でもなく怪我^{けが}をしているわけでもないのに、私たちの「からだ」や「あたま」を人為的に、自分の意思で作り返してしまうことは、どこまで許されるのでしょうか。

これからお話ししたいのは、このような「からだ」や「あたま」を科学の力で「改造」してよいのかという「エンハンスメント」の倫理問題です。

「エンハンスメント」という言葉自体は、強めること、増強という意味で、「増進的介入」などと訳されることもあります。が、「治療を超えた医療的介入」のことを指します。端的に言えば、より美しく、より強く、より有能な人間をつくるための技術的介入、すなわち、私たちの身体を通常以上の力や機能をもつものに「改造」するために、手術を行ったり、薬物を使用したりすることです。

エンハンスメントは、生命倫理学の中の新しいテーマで、近年、これに対する関心が急速に高まりつつあります。

従来の生命倫理学が、（生殖医療を含め）おもに病気の人を治療する場面で発生する倫理問題を扱ってきたのに対し、エンハンスメントでは、すでに健康な人を「よりよく」改造することが問題となります。

たとえば、事故などで顔に怪我をしてしまった人に形成手術を行って、元の外見に近づけることは「治療」ですが、医学的な必要性がないのに、本人の希望で鼻を高くしたり、目を二重にしたりすることは、「治療を超えた」整形エンハンスメントです。

あるいは、重度の近視により、生活に著しい不便さを感じている人に、目の手術を行って視力を改善させ、QOL（生活の質、人生の質）を向上させることは、「治療」になりますが、視力に問題がないのに、ゴルフなど、遠方を見る視力が重要となる競技で、他の選手よりも優位に立つために、手術を受けて常人以上の視力を得ることは、「エンハンスメント」にあたります。

ここに技術の二重性という問題が出てきています。

いま例にあげた鼻の形成術や目の手術などのように、「治療」に使われている技術が、エンハンスメントにも使われています。すなわち、おなじ技術を、治療のためにも、エンハンスメントにも利用することができるのである。

薬についても同様のことが言えます。たとえば、発達障害と診断された子どもに処方されていた集中力を高める薬が、他の子どもたちによって「スマートドラッグ」として用いられていることが報道されています。

両者は連続的です。発達障害の診断自体が、現段階では曖昧さの残るものであるため、詐病（病気のふりをする）により、薬を不正に入手するケースさえもあると言われています。このように、当初は、治療目的で開発された薬や技術が、グレーゾーンでの流用を経て、ついにはエンハンスメントに転用されるという流れがあります。

科学技術や医療技術を利用して、私たちの身体や頭脳や心を、より強く、より美しく、より優れたも

のに作り変えることは、どこまで許されるのか。そもそも、そのような人間の「改造」は「よいこと」なのか。その技術が広く用いられるようになると、私たちの生きるこの社会や世界や人生は、一体どのように変化していくのか。

競争社会と言われる現代では、このような治療目的ではない医療技術の利用のかたちがつぎつぎと拡大しています。

容姿を望み通りに変える美容整形、筋力や心肺機能など、運動能力を高めるドーピング、集中力を高め、勉強を効率化し、当日のパフォーマンスを上げるためのスマートドラッグなど、私たちの身近なところまで、これらの技術は広がりつつあります。

ちよつと想像してみてください。もし自分の身体や頭脳の性能、容姿の美しさなどを、思い通りに、自分の好きなだけ変えたり、あるいは、まったく別のものに取り替えたりすることができるとしたら、みなさんは、どのような自分になりたいですか？

もしも技術の力によって、世の中のすべての人が、運動神経抜群、めいせき頭脳明晰で、しかもモデル並みに美しい人ばかりになったとしたら、そこに広がるのは、どのような世界でしょうか。私たち一人一人の人生はどのようなものになるでしょうか。

これまでの文化では、私たち一人一人が自分の能力を高めることは、与えられた身体的条件（身体能力や認知能力〔計算力や記憶力〕など）のなかで、個々人が努力することで達成されると考えられてきました。ところが、身体的な能力や頭脳のはたらきを薬物などで増強（エンハンス）できるようになると、そのような「努力」の価値や意味が成り立たない文化ができあがっていきます。

『生命倫理のレッスン 人体改造はどこまで許されるのか？』小林亜津子

問一 本文を二〇〇字以内で要約しなさい。

問二 本文を読んで、「エンハンスメント」を肯定する（許容する）か、否定する（許容しない）か、自分の考えを八〇〇字以内で述べなさい。